

マクロン革命と奇跡のメディア —左右超克の新時代を創造する—

伊藤 英一*

- 1、音声を介してのメディア ～音読、朗読、演劇、演説、聞くこと～
- 2、紙のメディア① ～本～
- 3、紙のメディア② ～新聞、雑誌～
- 4、電子のメディア ～ツイッター、フェイスブック、ユーチューブ…～
- 5、独自メディアへの道 ～政党ジャーナリズムへの回帰と新生～

ほんの三年ほど前には、ほとんど無名の存在だった30歳代の人物が、「天空をつかさどる神ジュピター」になぞらえられるまでに飛翔し、今春、フランス共和国の大統領に選出された。歴代最年少39歳で大統領となったエマニュエル・マクロンは、若々しくエネルギーで縦横無尽な活躍ぶりを見せ、国内的には「口にしたことは総て実行する」と全公約の即時断行に着手するという革命的な政策を展開、ヨーロッパのリーダーと目される存在となりつつある。

メディアが久方ぶりに底力を発揮して、このマクロンを三年足らずの間にスターダムのトップに押し上げたのだから、フランスを世界に羽ばたかせる華麗な活躍を支えるのは当然かと思いきや、逆に枝葉末節の言葉尻を捉えて、もっぱらマクロンの足を引っ張り、メディアの底の浅さが露呈している。革命を眼前にして、昔のように血が流れる訳でもないのに、いざとなると腰が引けてしまうのはメディアの方なのだ。これまた、昔からメディアの世界で見受けられたデジャヴュ (déjà-vu)、どこかで見たことのある光景で、なかなか興味深い。しかし、一部（あるいは全部）メディアの非建設的・非生産的な動きに怯むことなく、正面突破を仕掛け、主体的・能動的にメディアを動かしてしまうマクロンの動きからは、世界の未来を主導する人物として嘱望されるような歴史的時軸の確固とした基盤がうかがえると同時に、メディアについて考えさせられることが多い。

大統領就任間もない2017年5月29日には、ロシアのプーチン大統領をヴェルサイユ宮殿に招き会談した。イタリアのタオルミネで開催されたG7からもクリミア問題で排除されたままのプーチン大統領を（本来はG8の筈なのに）、そのG7の2日後にフランスへ招くという心憎い演出であった。ただ、一時間近くの記者会見に共同で臨みながら、ほとんどマクロンの独演会で、プーチン大統領はマクロンの隣で静かにしている珍しい光景が見られた。それでも、直接の1対1のコミュニケーションを活用し、ピョートル大帝時代に遡る仏露の歴史的関係の長さや深さが掘り起こされていた。フランス大統領選を通じて候補者中、一貫して最も厳しい対露路線を貫き、ヴェルサイユでも、クリミア問題やフェイク・ニュースへの疑念での溝は埋まらなかったものの、少なくともネット等を介してギクシャクしてきた両大統領の信頼関係は大きく改善され、仏露両国の歴史に裏打ち

*いとう えいいち 元日本大学法学部新聞学科 教授

されたものとなった。

また、6月1日に米国のトランプ大統領が「気候変動抑制に関するパリ協定」から脱退する旨を表明すると、即刻、マクロン新大統領は狭隘な一国優先政策よりも地球的視野に立った政策が優先されるべきとして、英語による反対演説をネットで流し、加えて「MAKE OUR PLANET GREAT AGAIN」とツイート、39万件を超える♡いいね」を獲得した。⁽¹⁾トランプが選挙キャンペーンで使ったスローガン「Make America Great Again」をもじったのだ。

しかし、マクロン自身はツイッター活用には消極的で、むしろ否定的ですらある。彼が好んで選択するメディアは、直接的に面と向かって談じる、それこそ文字通りの面談であり、あるいは聴衆に呼びかける演説なのだ。

また、G7、G20と続いた多角交渉の場では、握力自慢のトランプ大統領から求められた握手に、何気ない顔で平然としながらも強力に握り返して、完璧に打ち勝った。加えて、パリ協定脱退に関する逆ツイートの件もあり、仏米関係への悪影響が懸念される局面もあった。しかし、7月13日、トランプ夫妻をエッフェル塔のレストラン、ジュール・ヴェルヌに招待した上、フランス革命記念日にあたる翌14日にはシャンゼリゼでの仏米合同軍事パレードを両大統領が並んで閲兵した。米国独立戦争へのフランスの協力から、第一次世界大戦で米国参戦により救われたフランスへの回顧まで300余年に及ぶ不変不動の仏米関係を、直接的なメディアを用いて演出したのだ。第一次世界大戦時の米国陸軍の制服を身にまとった懐かしのサミーズの行進や、凱旋門の上空を通過する仏米合同編隊の勇姿にトランプ大統領も満足げであった。多角交渉の場では、孤独に近かったトランプ大統領の隣に立って、今から100年前にフランスを助けてくれた強くて頼りがいのある米国を持ち上げたマクロン大統領に、フランス国民の中にはいささか遣り過ぎではとの不満もあったと思われる。ともあれ、仏米の300余年にわたる揺るぎない友好関係はパリのシャンゼリゼで再確認されたといえよう。

厳しく迫って、優しく遇する。バランスの取れた外交的な発想は、フランス国内政策を巡っても同様に生かされている。

革命的とも言える労働法の抜本的改正に対しても、フランス恒例のデモやストライキは、参加者は想定より遥かに少なかった。新聞・テレビなどのメディアは散々煽ったりしたもの、意外に反対運動は盛り上がっていない。日曜日の労働禁止の緩和策反対と叫んでみても、サラリーマンやOLの71.3%が日曜日に働いたことは一度も無いと答えるフランスの現状について、これからも通用するとは思っていないのだろう。⁽²⁾

デモを呼びかけていた「屈しないフランス (la France insoumise)」党のメラシオン党首にしても、11月21日、エリゼ宮でマクロン大統領と会談した後、「議論が楽しかった。問題から逃げない彼と話ができるのは素晴らしい。(オランダ前大統領のような)ウナギと議論しているような感じはなかった。」⁽³⁾と嬉しそうに語っている。ここでメラシオン党首が「議論が楽しかった」と話しているのは、何気ない御愛想に過ぎないと思われるかも知れない。が、今回のフランス大統領選第1回投票に臨んだ予選候補者の内、桁外れに語彙が豊富で明瞭だった候補者がメラシオンで、むしろマクロンは情緒的な言葉使いであるとスタンフォード大のセシル・アルデュイ (Cécile Alduy) 教授は分析している。⁽⁴⁾メラシオンが手放しで会談後の感想を述べることは、議論の内容の高さを示している。同時に、マクロン大統領の1対1の議論が、対話者にとって魅力的なもので

あることも想像される。マクロンと話した後は、彼との話に魅惑 (charmé) されたとか、誘惑 (séduit) されてしまったとの表現がメディアに頻出する。マクロンの父によれば、実の肉親から見ても周囲を巻き込む魅惑があったそうで、息子のエマニュエルは「椅子ですら誘惑してしまいかねない (son fils séduirait une chaise)」⁽⁵⁾ ようだったと回顧している。「惚れ申し候」とは、西郷隆盛が勝海舟について記した印象であるが、相手を蠱惑して巻き込んでしまうのがマクロンらしい。

ところで、本筋から若干ずれてしまうが、日本の新聞メディアなどでは多くマクロン大統領の不人気振りを伝えたがる傾向がある。しかし、労働法をはじめとした全方位的な改革を断行しつつある段階での人気・不人気の判断は注意を要する。

例えば、11月23日付けのフィガロ紙は「米国投資家はエマニュエル・マクロンの魅力に参っている」⁽⁶⁾ との見出しで、「在仏米国商業会議所の調査によれば、フランスで50万人を雇用する米国系4千社の72%が、フランス経済の見通しに積極的」であると報じている。マクロンの経済政策への肯定的評価をプラスに受け取る新聞メディアがある一方で、否定的、あるいは揶揄を含む皮肉を交えて伝える向きもあることは勘案しておく必要がある。

むしろ、これだけの犠牲を伴う改革を断行している段階で、4割前後の支持を受け、57%が好印象を抱き、⁽⁷⁾ 逆にフランス伝来のストライキなどの動きが全く盛り上がらない実態こそ注目すべきと思われる。社会党系支持者の66%、共和党系支持者の63%と、左右の問わない層から好意的な印象を受けているのだ。

ところで、本筋に戻って、弱冠39歳のマクロンが生まれて最初に受けた選挙で一挙に大統領に選出されるだけに留まらず、マクロン新党の若者たちが国民議会の過半を占め、既存政党は往時の姿を失ってしまった。大幅に刷新された世代が、これからのマクロンの改革を支えることになったのだ。

このマクロン革命という奇跡を生んだメディア、あるいはメディアの奇跡を、順次、追ってみよう。

1、音声を介してのメディア ～音読、朗読、演劇、演説、聞くこと～

『「大きな声で」、祖母の傍で本を読む。これが、5歳になったマクロンの日課だったという。今では少々忘れられている作家だが、祖母が愛していたジョルジュ・デュアメル、あるいはモリエール、ラシーヌやモーリアック、ジオノを分かち合えたことは、計り知れない贅沢だった』⁽⁸⁾ とエマニュエル・マクロンは述懐している。

声に出して読むことと、家族の気遣い、思いやりに満ちた幼少期を振り返りながら、マクロンはレオ・フェレ (Léo Ferré) が歌った「時と共に (Avec le temps)」の中から「余り遅く帰らないで、風邪を引かないで (Ne rentre pas trop tard, surtout ne prends pas froid)」を引用、聴く度に感動させられるという。もっとも、この歌詞は「時と共に、時と共に、みんな去ってしまう。情熱を忘れ、声を忘れ… (Avec le temps, avec le temps, va, tout s'en va. On oublie les passions et l'on oublie les voix…)」と、かなり低く、小さな声で歌われる部分ではあるが。

声と文学への嗜好は演劇にもつながり、14歳、リセ2年生となったエマニュエル・マクロンは、演劇の指導を、当時38歳だったブリジッド先生から受ける。

その時から15年後の2007年、二人は結婚、演劇の趣味も続くこととなった。結婚式での保証人

は、流通業界のパイオニアで新聞人でもあるアンリー・エルマン (Henry Hermand) とマルク・フェラッチ (Marc Ferracci) 教授である。

音読や演劇を通じて、声を出して伝えることに練達を重ねて来たマクロンは、大衆を前にした演説でも多くの人を魅了した。

2016年5月8日、オルレアン市長の招請で臨んだ祭での演説もその一例であろう。そこで、「ジャンヌ・ダルクはシステムに亀裂をいれた (fend le système)」とマクロンは述べて、聴衆の喝采を浴びた、今日のフランスでシステムという、融通がきかない旧弊、非効率で人情味にかけ御役所的体制など、多く否定的な意味で使われている。分断していた当時のシステムを破壊し、左右の区別なく一体に纏め上げることによって、フランスに勝利をもたらしたのがジャンヌ・ダルクだと、マクロンは贅辞を述べたのである。

ただ、この当時、マクロンはオランダ大統領の下で経済大臣であり、フランス政界での格からしてジャンヌ・ダルクに言及するには時期尚早と見る向きもあった (しかし、現地市長に招かれたのだから OK、いや、そこは諸般に配慮して遠慮すべき、と「何処も同じ秋の夕暮」的シーンが展開されたのだ)。当然、演説の内容も抑制を効かさざるを得ない、推敲の重ねられたものとなった。逆に、この制約条件が、マクロンの演説を、国民全体への慎重な配慮の中にも果敢な挑戦への姿勢を感じさせる魅力を放ったのだと思われる。また、若過ぎると軽く見られないようにと少し低く保とうとしながらも、時折、出てしまう若々しい声が魅力的とも評された。

しかし、2016年8月30日、大統領選を睨んでマクロンが経済相を辞すると、これを支持する輿論は84%に達すると同時に、マクロンの発言を抑制するものが外された。

その翌日31日のフランス文化放送のラジオ番組で、フレデリック・サイス (Frédéric Sais) は、マクロンの辞任について、「①システムが腐っている / ②新しさが必要だ / ③新しさとは自分だ (“le système est pourri- il faut de la nouveauté- et la nouveauté c’est moi”）」との三段論法だと解説、マクロンは「成功とは失敗に失敗を重ねても情熱を失わず前進する (“réussir c’est aller d’échec en échec sans perdre son enthousiasme”）」スタイルでチャーチル流だと結んでいた。今日のフランスで、システムとは旧弊、体制、といった意味で使われていることは既に触れたが、マクロンは反システム (anti-système) であるとの立場をとっている。これに対して、マクロンこそシステム側だと批判するものもいた⁽¹¹⁾のは確かである。ただ、マクロンに言わせれば、システムの是非ではなく、システム側を歩んできたからこそ、システムの悪い部分を熟知しており、その改革ができるのはマクロン自身しかいないということになる。

以後は、マクロンを中心に立ち上げられた党 (アン・マルシュ / En marche! = 「歩こう」とか、「前進」の意味; 「En marche!」の頭文字をとると「EM!」となり、エマニュエル・マクロンのイニシャルに感嘆符が付いたものになる) を基盤に積極的に半年後に迫った大統領選に向けての遊説活動が展開されていった。

枠が外れるメリットもあれば、デメリットもある。何千人もの聴衆と向かい合い演説を繰り返している内に、絶叫型がたたり声帯を壊すことすら危惧されるような状況が続くようになった。

2016年12月10日、パリのヴェルサイユ門に参集した1万5千人を前に、マクロンの全身全霊をかたむけたかのような熱弁は会場を沸かせた。同時に、時として外れてしまう声は周囲に心配をかけ、SNS などでは失笑を買ってしまうような場面もあった。⁽¹²⁾ 腹の底から絞り出されるような絶

叫と、心のすべてから訴えて行く姿勢は、聴衆の感動を呼ぶ面もあると同時に、先行きに懸念を抱かせた。

ここでマクロンに発声上のコーチ役を引き受けたのが元バリトン歌手のジャン・フィリップ・ラフォン (Jean-Philippe Lafont) である。ラフォンは、一昨年夏にバスティーユのオペラ座で練習中に階段を18段も踏み外して現役引退を余儀なくされたものの、発声のコーチとしては未だ健在なのだ。マクロンの姿勢は真直ぐで正しいが、呼吸は乱れがちだった。横隔膜を使うことは大切だが、腹に呼吸させるわけではない。息を特に吸うという感覚は抑えて、自然に空気が入ってくるにまかせるような状態を保つことが大切なのだ。⁽¹³⁾ 掌のかすかな香りを嗅ぐような気持ちで、過度に息を吸ったりしない。また、副鼻腔を清潔にしておくことも重要で、そのためには両方の手のひらに微温水をうけて、その水蒸気を吸う程度で十分といった詳細なものであった。⁽¹³⁾ 以後、演説するマクロンの呼吸は維持され、リズムが適確にとれるようになり、明瞭で、透明感のある声が続くようになったという。

確かに2016年12月10日を境にして、それ以前と以降の演説では発声が全く違っているのは興味深い。マクロンは素直で、よく考えて年長の教訓を吸収する素晴らしい生徒である、との評価が高かったが、その一端がここからもうかがえる。

もっとも、2017年5月7日、フランス共和国大統領に当選して以降のマクロンの演説のように、完璧ともいわれる破綻のない演説が、国民を一丸とするのに適しているのかどうか。むしろ適度に外れてしまう声に熱意を感じる人もいたりするのが、声というメディアの奥深い繊細さなのだろう。

しかし、マクロンの伝記を書いたアンヌ・フルダは、マクロンの最も顕著な特質として「聞く」能力を挙げる人が多い、と記している。「聞くこと、いつも聞くこと (d'être à l'écoute, toujours à l'écoute)」にマクロンらしさがあるという。加えて、耳を傾けて「聞くこと」には、自分を明かさないうで済むという素晴らしく顕著な利点があるのだ。⁽¹⁴⁾

聞くことと、話すことの間にある、間の取り方の御手本のような演説があった。

厳寒のパリ、シャンゼリゼからマドレーヌ教会一帯にかけての道路を埋め尽くした80万人から100万人の人々を前にして、故ジョニー・アリデー (Johnny Hallyday) 告別の拍手をうながしたマクロンによる10分余りのスピーチである。

マドレーヌ教会に入りきれない大勢のファンたちの雑音と不協和音の中、時間をかけタイミング良く間を置きながら、ゆったりと清聴に向かわせ、最後に湧き上がる拍手で一体感を醸し出していた。植民地時代の清算をはかるアルジェリアからのとんぼ返りで、エルサレム問題をイスラエル首相とエリゼ宮で話す合間をぬっての2017年12月9日のことである。

ちなみに、ジョニー・アリデー民衆葬の実況テレビ中継では、TF1 (第1チャンネル) は37.8%の視聴率、ライバルのフランス2 (第2チャンネル) は29.9%の視聴率という昼の時間帯での記録を示した。⁽¹⁵⁾ この二つのチャンネル分だけでも計67.7%が視聴したことになり、更にBFMTVの実況テレビは5.6%、情報チャンネルのLCIが0.6%、CNewsが0.5%等々の記録が続いた。

ロック歌手という音で伝える天職がフランスでも完全に根付いていることを改めて実感させる日となった。

2、紙のメディア① ～本～

今の世界で、本好きな政治リーダーは多くはなく、中国の習主席のようにフランス訪問中、ロマン・ロランに触れたりするトップは少数派に属する。

マクロンのように編集者として、校閲者として、自ら筆をとる執筆者として実績を挙げてきた人物は珍しい。

本好き、読書好き、それも声に出して本を読むことを好むマクロンの傾向は、前項で既にふれた。ここでは、むしろ編集し、筆をとるマクロンを取り上げてみよう。

2016年11月24日、マクロンは「革命 (Révolution)⁽¹⁶⁾」と題する本を XO 書店から出版している。経済相を辞して2か月余、パリのヴェルサイユ門で演説する直前であるが、これをフランスのラ・ロシェル西方の大西洋にあるレ島 (Île de Ré/ イル・ドゥ・レ) で書き上げたという。俳優で朗読家としても知られるファブリス・ルキーニ (Fabrice Luchini) から借りた別荘に籠ったのだ。ちなみに、通信業界では Île de Ré は、フランスの海底ケーブル敷設船の船名として知られている。

この著書の中で、マクロンは2ページにわたってポール・リクール (Paul Ricœur)⁽¹⁷⁾ との出会いと、お手伝いの学生として本当の意味での歴史を学ぶことができた2年間について記している。特に、20世紀を通じて生じた数々の問題の重み、悲劇的だった時々について、理論と現実の間を行き来しながら、世界の流れを解明し、日常の意味を築き上げようとする師匠の姿を追憶している。

アーカイブ的な仕事の助手を探していたリクールに多少の誤解もあって、リクールの著作を殆ど読んだこともないマクロンを紹介したのがフランソワ・ドス (François Dosse)⁽¹⁸⁾ 教授だった。しかし紹介されたその日から、リクールとマクロンの波長は響き合ったようで、夜が更けるのも忘れて明かりを燈さないまま話し込んだという。

リクールは、2000年にスイス社から出した「記憶・歴史・忘却 (La mémoire, l'histoire, l'oubli)⁽¹⁹⁾」の冒頭で、文体への的確な批評と考証・注釈の体裁整理にエマニュエル・マクロンが貢献してくれたと、謝辞を記している。この時のマクロンは弱冠23歳の学生だった。

マクロンが頻繁に用いる、「同時に (En même temps)」の考え方は、リクールや、リクールを通じて私淑するようになったミシェル・ロカール (Michel Rocard) との交流を思い起こすと、マクロンの主張するところが良く解ってくる。リクールとロカールからキリスト教社会主義の考えをマクロンは継承しているが、マクロン自身はイエズス会系のカトリック教徒であり、プロテスタントであるリクールやロカールと異なる面もあるが、逆に多文化主義的な寛容性の鍛錬の場にもなったようだ。左の出身であることは確かだが、右でもあり、左でもあると自己定義するマクロンの思潮は、マクロンが一時は編集にも携わったエスプリ (Esprit)⁽²⁰⁾ 誌への彼の寄稿文からもうかがえる。

3、紙のメディア② ～新聞、雑誌～

フランスのマス・メディアの大半は、ここ10年程の間に、10人の手中に握られてしまったといわれるが、特に新聞メディアの経営状況は芳しくない。

2010年、ル・モンド紙が経済的困難に直面した際、無料のコンサルタントとしてル・モンド編集局に手を貸したのがマクロンであり、当時はロスチャイルド家の中核であるロッチルド銀行の行員であった。⁽²¹⁾ この折、ル・モンド紙を傘下に収めたのはピエール・ベルジェ (Pierre Bergé) と他

二人の経営者である。ベルジェは、この2017年9月8日、86歳で逝去しており、日本ではイヴ・サン＝ローラン (Yves Saint Laurent) を支えて来たファッション界の大立者として著名であるが、マクロンのメディア露出が派手になったここ三年程の動きの中で、マクロンを支援してきた有力者でもあった。

ちなみに、このル・モンド買収の件では無料のコンサルタントを務めたマクロンだが、2012年4月中旬、ネスレ社が119億ドルでファイザー社の小児用乳食料部門を買収したような案件まで無料であった訳ではない。

もっとも、経営陣が変わったからといって、ジャーナリストの独立性や報道の自由が揺らがないのが建前ではある。

「順風に帆を揚げて (Le vent dans les voiles)⁽²⁴⁾」と筆を起こして、マクロン政権が改革の手を緩める様相は全く無い、とした今年 (2017年) 11月6日付けル・モンド紙の記事は世論調査に示される不支持率の高さなど吹き飛ばさんばかりの内容であった。加えて、読者からのリアクションは少ないながらも9件すべてが賛成で、このまま改革を推進すべきとの意見であった。

また、政敵でもあるメランション党首が、マクロン政権半年間の戦いは1対ゼロでマクロンの圧勝と述べたことを伝える10月30日付け同紙記事⁽²⁵⁾には158のリアクションがあったものの (11月27日現在)、メランション一人の戦いや労働組合の動きの鈍さを反映し、マクロン革命の先行き静観といったものが多かった。

経営陣は変わっても、ジャーナリストは変わらないと言うものの、読者層や周囲の動きは感じられる。

また、先見性と柔軟性豊かだったベルジェ亡き後、ル・モンド買収の折にも噂されたようなマクロンとマンクとの関係も懸念材料の一つである。マンクは、情報社会のエキスパートと自認している人物ではあるが、1970年代後半のフランス情報化政策の失敗を象徴するミニテル計画を推進した責任者であることも記憶しておく必要がある。

このところ、マクロンがフランスのマス・メディアに冷淡であるといった評価が流れたりもするが、マクロンのマス・メディアへの理解は鋭いものがあると分析する学者も多く、いつか「卓袱台^{ちゃぶだい}をひっくり返してやるとか、ひっくり返せると考えている (Macron veut et pense pouvoir renverser la table)⁽²⁶⁾」のかも知れない。

ここで、フランス大統領選に先立つ2年間に、フランスの紙媒体がマクロンを競って取り上げた様相を振り返っておこう。

ル・モンド紙、リベラシオン紙 (Libération)、ロプス誌 (L'Obs; 旧ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール誌)、レクスプレス誌 (L'Express) の4媒体が⁽²⁷⁾、2015年1月から2017年1月までの2年間に、マクロンを取り上げた記事の件数は8千件を超え、メランション、モントゥブール、アモンの3候補を取り上げた合計件数の7400件を上回った。ル・モンド紙に限って見ても、マクロン候補2000件に対し、3候補合計1900件に止まった。

振り返りついでに、更に2014年にまで遡って同年2月21日付けのル・モンド紙の記事を覗いてみよう。

「ミシェル・マルシャン、パパラッチのミミ (Michèle Marchand, la Mimi des paparazzi)⁽²⁸⁾」との見出しが打たれた長文の記事である。

そこでは、「フランスの大衆紙／大衆誌はミミ無くして存在しない (La presse people française n'existe pas sans Mimi)」との文がある。ミミと言うのは御年70歳になるミシェル・マルシャン (Michèle Marchand) の愛称だ。

フランスにはガラ (Gala) 誌、パリ・マッチ (Paris Match) 誌、パブリック (Public) 誌、クローザー (Closer) 誌、ヴォワシ (Voici) 誌等の大衆誌が出回っているが。例えばヴォワシ誌が扱うフランス絡みのコンテンツの90%はミミの創設したベストイメージ (Bestimage) 社が取り扱っているという。この会社は「パパラッチの厩舎 (écurie de paparazzis)」とも呼ばれる。

このミミが、2016年春から、マクロン夫妻のメディア担当の一翼を引き受けている。⁽²⁹⁾ベルジェと並ぶル・モンド紙やロプス誌の出資者であるグザヴィエ・ニール (Xavier Niel) の紹介があったと言われているが、ミミとマクロン夫人は懇意であるとされている。

2016年夏、経済相を辞する2週間程前に発行されたパリ・マッチ誌3509号の表紙を飾ったのはビアリッツの海岸で遊ぶ水着姿のマクロン夫妻だった。若々しい38歳 (当時) のエマニュエル・マクロンと24歳年上のブリジッドが一緒になった逆「年の差」カップルを好ましいとするイメージ戦略に、他の大衆誌も競って馳せ参じるメディアの旋風が舞うことになったのだ。この前後、ガラ誌は10回、マリ・マッチ誌は3回に渡って夫妻の姿を表紙に採用している。パリ。マッチ誌の編集責任者が、部数が10倍に急伸することもさることながら、全く無名のマクロン夫妻の知名度が高まり、夫妻の素晴らしさが知られることに喜びを感じたと述べている。

4、電子のメディア ～ツイッター、フェイスブック、ユーチューブ…～

霞が関や桜田門と聞くと、地名であると同時に、そこにある官庁やそこで果たされている機能が思い起こされる。フランスでも同様で、ベルシーと言うと往時のワイン卸業者の倉庫街だった地名ではあるが、セヌの河面に勇姿を映す役所の意味でも使われる。その役所には経済財務省 (Ministère de l'Économie et des Finances) という名前があるのだが、いささか普段使いには長すぎるのでベルシーで済ませるのだ。

2014年8月26日、エマニュエル・マクロンは、経済産業デジタル相 (ministre de l'Économie, de l'Industrie et du Numérique) として、このベルシーに着任した。この初登庁時、マクロンはツイッターのアカウントも開いていなければ、フェイスブックのページも持っておらず、⁽³⁰⁾若くてデジタル情報分野も管轄する大臣としては周囲に意外感を与えるところもあったという。

しかし、大臣就任後4か月足らずで「経済の成長、活動、機会均等のための法律 (loi pour la croissance, l'activité et l'égalité des chances économiques)」案を提出、国民議会の反対を押し切ってフランス共和国憲法49条3項適用で強行突破、2015年8月には憲法評議会の審議終了により発効するまでにこぎつけている。今日では「マクロン法 (Loi Macron)」とも呼ばれるこの法により、配車アプリのウーバー (UBER) 利用や商店の日曜開店等々の規制緩和が進むことになった。

この時期、多くの反対に直面しながらも正面から突っ切って行く実行力と、反対派への説得力、テレビやラジオを通じても真っ正直に答えようとするマクロンの姿勢⁽³¹⁾に高い評価を寄せられるようになった。同時に、その厳しい意見への反撥が強くなって行く傾向も目立っていく。

ただ、この時期に至るまで、マクロンは一度の選挙の洗礼を受けたこともなければ、マクロン法の例でも解る通り国民議会の反対は強かったものの法として成立させるなど、マクロンは多数派の

支持を求めないで済んできたという稀有な事実は注目に値する。

大臣としての初登庁時に、ツイッターの登録もフェイスブックのページも無かった話は先に触れたが、マクロンには、その必要も無かった、無くて済んだのだ。逆に、顧客の情報は勿論のこと、自分のことも、下手な自己顕示をする暇があったら仕事をやれという世界で、守秘こそ宝という世界にいたのだ。

2017年の大統領選や国民議会総選挙が視野に入ってくるまでは、ツイッターもフェイスブックも必要が無かったのである。

米国のオバマ (Barack Obama) は SNS を活用して大統領に登りつめ、⁽³²⁾ トランプはツイッターをヒラリー・クリントン候補より 150% 多く用いることと、その波及効果で米国のメディア業界に活況をもたらすと同時に、大統領としての地位も得られたのかも知れない。⁽³³⁾ フランスを含め他の国々でも、多少なりとも似たような現象は見受けられる。

しかし、マクロンに限ってみれば、大統領に就任してからも自分自身はツイッターから距離を置いて来たことが彼の強みでもあり、だからこそ成功し、これからも運命の女神は微笑むのだろう。

2017年11月7日、エリゼ宮でタイム誌 (TIME) と会見を行っている。その模様を報じるタイム誌 HP では、こう記されている。「マクロン自身はツイッターを使わない—統治に必要な距離の類いと整合しない、と彼は鋭く指摘した (Macron himself does not use Twitter—“It’s not compatible with the kind of distance you need to govern,” he says pointedly) ⁽³⁴⁾」。

このところ人気は下降気味なことについても (12月に入ってから盛り返しているが)、マクロン自身に言わせれば、大統領就任直後は何もしなかったから人気があっただけで、⁽³⁵⁾ 実地に活動して人気を失うのなら、それはそれで良い、と彼らしい強気の姿勢が貫徹されている。

この会見の様子は、2017年11月20日号のタイム誌に掲載されており、表紙には「次のヨーロッパのリーダー (The Next Leader of Europe)」とのタイトルが大きく白抜きされている。もっとも、表紙の右下に小さい文字で抜かれた「フランスをリードさえ出来れば (If Only He Can Lead France)」との条件付きではある。この号には、もちろん、皮肉や辛辣な部分も含まれているが、マクロンの挑戦が成功すれば、フランスがより重要な大国になれるだろうとしている点で、⁽³⁶⁾ 改革への期待が込められている。タイム誌は5月22日もマクロンの特集を組んでおり、半年間で2度の特集を出したことになる。

英国のエコノミスト誌 (The Economist) ⁽³⁷⁾ も、既に2度の特集を組んでいるが、マクロンの労働法改革には58%の支持があることや、他の改革にも端緒を切り改革への第1関門を突破したことを前向きに報じている。

ここで、タイム誌記載のツイッターの話に戻ると、タイム誌はマクロンがツイッターを使っていれば労働法改正反対の怒りの声を知ることができるのにと記している。⁽³⁸⁾ しかし、様々な意見で八方ふさがりとなり立ち往生してしまった旧来政権の愚を乗り越えることを訴えて登場したマクロンにとって本当にツイッターが有効かを考えれば、いささか疑問を感じざるを得ない。

また、断るまでもないが、マクロンがツイッターを使わないと言っているのは、あくまでも本人による個人的な双方向通信メディアとして使わない、と言っているだけで、例えばトランプ大統領への「MAKE OUR PLANET GREAT AGAIN」とツイートしたことは既に冒頭で触れた。広報的メッセージ伝達手段としてはそれなりに活用していることは明らかだ。

5、独自メディアへの道 ～政党ジャーナリズムへの回帰と新生～

ニューヨークにある国連本部での演説や会議に先立って、2017年9月19日、マクロンはCNNのクリスティアンヌ・アマンプール (Christiane Amanpour) のインタビューに応じた。イランや環境問題への米国の対応に再考を促すと同時に、北朝鮮との関係については、「言葉に言葉を返して圧力を高めるのではなく (My point is not to increase pressure by issuing words against words)」、「緊張を緩和し、地域の人々を守らなければならない (We have to decrease tension and protect people in the region)」と訴えている。特に日本を含む地域の人々を保護する必要性を強調した。⁽³⁹⁾

国連本部会議場での演説は、⁽⁴⁰⁾ 地球的視野に立っての環境保全を訴える格調の高いもので、イラク戦争に反対して再考を訴えた2003年2月14日のドミニク・ドゥ・ヴィルパン (Dominique de Villepin)⁽⁴¹⁾ 外相の名演説を彷彿とさせるものだった。

しかし、この時、フランスのマス・メディアが問題に取り上げたのは、マクロンが外国メディアであるCNNのインタビューに先に応じたことで、フランスのジャーナリストの面子が潰されたことに絞られた。マクロン側からみれば、ニューヨーク訪問の目的からすれば米国や世界に訴えかけることを優先するのは当然と、鼻先であしらいたくもなるだろう。

その頃のフランスのメディアの関心は、もっぱら十日ほど前の2017年9月9日、アテネを訪問中のマクロンが当地のフランス人会 (la communauté française en Grèce)⁽⁴²⁾ で行った談話⁽⁴³⁾ で用いた三つの単語が不適切だったのではないかということにあった。談話でマクロンが強調した労働法改正の必要性やメリットなど肝心の中身はメディアの眼中になく、ましてや現地のフランス人に訴えた本来の趣旨など、そっちのけにされたままだった。三つの単語だけを切り出して、それらの単語が使われている全体のコンテキストを無視、くたくだと適切・不適切を巡る質疑を繰り返すジャーナリストに囲まれては、嫌気が差して「空回りの議論はやめようよ」と言いたくなるマクロンも理解できる。

マクロンに言わせれば、「フランスのメディアは、話のコンテンツには余り関心がなく、⁽⁴⁵⁾ 上っ面の表現に興味を持ちすぎる」と、フランス・メディアのナルシスト的傾向を強く批判したくなる訳だ。

話のコンテンツ、中身を理解した上で、その良し悪し、効果・逆効果等々を客観的に伝える、それがメディアに期待される本来の仕事として大切なことである筈だが、それはそれで、なかなか大変ではあるのだろう。ジャーナリストである限り、相応の能力の高さがあるのは確かであろうが、情報・資料を読みこなし、足で調査をし、裏を取り、十分な理解をした上で、それでも残る疑問を質問としてインタビューに臨むには、それなりの努力がいる。

言葉尻を捉えて、他の仲間やライバルの尻馬に乗って、人の足を引っ張る。簡単だし、何となく批判的・客観的な職務を果たしているような満足感に自己充足される。批判的といっても、建設的、生産的、前向きな批判でなければ逆効果でしかなく、言葉尻を捉えることは批判の範疇にも入らない筈なのだが。

「フランスのメディアは全くナルシスト的だ (Les médias français sont “totalement narcissiques”)⁽⁴⁶⁾」とマクロンが断じるのも、それなりの背景と裏付けがあることは推測するに難くない。

そこで、いっそ自分たちのメディアを持って、一般メディアを迂回しようという動きが生じて来る。

マクロンが2016年4月6日に創設した「アン・マルシュ！（En marche！/歩こう！/前進！/党名略称のEM!はエマニュエル・マクロンのイニシアルでもある）」党は、2017年5月8日に「共和国アン・マルシュ！（La République en marche！/LREM またはLRM）」党と党名を変更、国民議会で総議席数577の内、309議席という過半を占めるまでに成長を遂げた。党員数は38万人弱である。

この成長の過程でフェイスブックをはじめ、SNSを多用した広報活動を展開してきているが、これを基礎にマクロンや党の意図を汲んだメディアに育てあげようと準備が進められている。ただ、フェイスブックのように強大な力を持つようになった私企業によるネットワークとそのアルゴリズムに依存し、利用者が知らず知らずの内に偏向したニュースに浸って行く傾向を助長し、フェイク・ニュースやプロパガンダに無防備になってしまうことへの警戒感を持っており、痛し痒しというところだ。

一方、メランション側も、2017年「不屈のフランス（La France insoumise/屈しないフランス/FI；ロゴタイプはフィφ）」党を創設、国民議会で17議席ではあるものの、党員数は55万とマクロン創設の「共和国アン・マルシュ！」党を上回り、マクロンのライバルとしての勢いを見せている。ここではユーチューブを中核に用いたメディアを運営しようとしている。

このような動きがあるからこそ、またこれを反面教師として、社会的標準の目安（repères）としての役割を果たすという本来的なメディアへの再認識が生じ、いずれの党派にも属さない真のプロフェッショナルとしてのジャーナリスト（les journalistes professionnels）が出現して欲しいとの期待も高まるのであろう。⁽⁴⁷⁾

残念ながら、フランスでは、アングロ・サクソン流の正当性に立脚したジャーナリズムが育って来なかったという。⁽⁴⁸⁾フランスでは、ジャーナリストとしての成功の尺度が、19世紀以来、政治家になるか、作家になるかにあったからと、フランシス・バル（Francis Balle⁽⁴⁹⁾）は分析する。要するに、フランスのジャーナリストの目標は自分がジャーナリストであることから脱却することが出世だと思っていたことになる。ジャーナリストがジャーナリストに留まって、同僚としての市民と民主的な議論をしてこそ、その役割の重要性が理解できるのではないかとバルは説いている。⁽⁵⁰⁾今更ながらという気もするが、フランスのジャーナリズムが危機に瀕している様相は垣間見える。

2017年12月1日、先の米国大統領オバマはパリのラジオ・フランスのホールで3千人の聴衆を前に演説、熱狂的な歓迎をうけた。1回の講演料が35万ドルで、ニューヨークでの講演料40万ドルよりは安いとされるものの、費用の大半は通信会社であるオランジュ等が負担した。オバマは大統領在任中に6回パリを訪問しており、今回のパリ訪問でも人気は抜群で大成功の様相だった。ここでも「独立したジャーナリズム」⁽⁵¹⁾が重要であることを強調していた。

目標・信念としての「独立したジャーナリズム」は、オバマの言及を待つまでもなく、今回の講演が行われたラジオ・フランスのホールも含むフランスの公共メディアであったORTF（Office de Radiodiffusion Télévision Française/フランス放送協会）、更にはその前身の組織で働く人々にも共有されていたものである。また、公共・民間を問わず、多くのジャーナリストの胸に秘められているものであろう。

ところで、先に、マクロンは選挙の洗礼を一度も受けたことがない、と触れた。マクロンにとって、生まれて以来、最初の選挙が大統領選挙で、そこで当選を果たしたことになる。

しかし、マクロンのように地盤も政治的な経験もない、しかし八方塞がりのフランスを解放しようという意欲だけは漲^{みなぎ}った若者を一挙に大統領に押し上げただけでなく、更にフランスの旧態依然たる既存政党の左右を問わず叩き潰して、今春の革命的な政治的状况を作り出す一翼を担っていたのもメディアである。たとえ、その力を示したメディアの相当部分が大衆誌や写真雑誌、あるいはテレビの類いであっても、そこで活躍したメディアこそフランス的と言え、フランス的と言えなくもない。

事実、世界の映像ビジネスや広報・広告ビジネスで、フランス流は実力を示してきたし、これからも世界を席卷する底力を秘めている。

肝心なことは、既存の体制を破壊した後、果敢に挑戦を続けるマクロンの変革を最適の方向に導いて行くチェック機能をメディアが果たせるか否かである。アングロ・サクソン流のジャーナリズムは、確かに、トランプに対抗することによりビジネス的にかつてない活況を享受し、ニューヨーク・タイムズのデジタル版のように一つのビジネス・モデルとして参考になる面もある。しかし、こちらフランスのメディアと類似した、揚足取りの側面もなくはない。トランプの姿勢に対抗している限りは正当性を体現しているように見えなくもないが、長続きする建設的な、生産的なヴィジョンを示しているとは思えない。これからのジャーナリズムを考えるには、アングロ・サクソン流ジャーナリズムを礼賛することでもなく、フランス流やドイツ流への悲観でもなく、地球的社会の視点に立った真に客観的な標準、メディアの果たすべき目安をしっかりと策定する作業から始めることが必要なのではなかろうか。

報道の自由は、信条・意見・表現の自由に立脚することは当然であるが、国際社会のあるべき未来を展望した報道の理念を目指してこそ説得力を持つのである。

注

なお、脚注に付したウェブ等の参照日時は、特に記載の無い限り、2017年12月14日23:00JST現在のものである。

(1) https://twitter.com/EmmanuelMacron/status/870407981044834304/photo/1?ref_src=twsrc%5Etfw&ref_url=https%3A%2F%2Fwww.lexpress.fr%2Factualite%2Fpolitique%2Fmake-our-planete-great-again-record-de-tweets-pour-macron-qui-detrone-hanouna_1914229.html

(2) http://www.lemonde.fr/les-decodeurs/article/2015/08/06/ce-que-contient-desormais-la-loi-macron_4714255_4355770.html

(3) “Donc il y a peut-être davantage le plaisir de la conversation avec quelqu’un qui a bien des défauts mais qui a au moins la qualité de ne pas fuir le débat”, a-t-il ajouté.

“Ce n’était pas les numéros qu’on a connus ici dans un passé proche où on avait l’impression de discuter avec une anguille, ce n’est pas le cas”, a-t-il souligné, dans une allusion à François Hollande.

<https://fr.reuters.com/article/topNews/idFRKBN1DL279-OF RTP>

(4) FRANCE 24 ; “Emmanuel Macron utilise un vocabulaire émotionnel”, <https://youtu.be/LW4Ep08S1qc>,

(5) Anne Fulda ; Emmanuel Macron –un jeune homme si parfait-, Plon, Paris, 2017, p.35.

- (6) Les investisseurs américains sous le charme d'Emmanuel Macron
<http://www.lefigaro.fr/conjoncture/2017/11/23/20002-20171123ARTFIG00016-les-investisseurs-americaains-sous-le-charme-d-emmanuel-macron.php>
- (7) <http://www.europe1.fr/politique/nouvelle-hausse-de-la-popularite-demmanuel-macron-3519026>
<http://www.parismatch.com/Actu/Politique/Sondage-Ifop-Sarkozy-et-Hollande-le-retour-des-ex-1416890>
- (8) Emmanuel Macron ; Révolution, Univers Poche (XO), 2017, 268pp., p.19.
cf. Révolution, XO, Paris, 24 novembre 2016, 270pp.
- (9) Ifop ; Sondage 31.08.2016, Les Français et la démission d'Emmanuel Macron du gouvernement
- (10) <https://www.franceculture.fr/emissions/le-billet-politique/emmanuel-macron-libere-delivre>
- (11) <https://www.ojim.fr/dossier-emmanuel-macron-et-les-medias-lamour-parfait/>
- (12) http://www.liberation.fr/france/2016/12/10/macron-fait-le-plein_1534452
- (13) <https://youtu.be/IhlwxtDR1s8>, Le baryton qui a façonné la voix de Macron - C à Vous - 26/10/2017
<http://www.leparisien.fr/societe/les-secrets-de-l-ex-baryton-jean-philippe-lafont-coach-vocal-d-emmanuel-macron-24-10-2017-7351104.php>
- (14) Anne Fulda ; Emmanuel Macron –un jeune homme si parfait-, Plon, Paris, 2017, (*op. cit.*), p.135.
- (15) Le Monde du 12 décembre 2017, p.20.
- (16) Emmanuel Macron ; Révolution (*op. cit.*).
- (17) *ibid.* pp. 25-26
- (18) <https://www.franceculture.fr/emissions/linvite-des-matins/emmanuel-macron-mes-propositions-pour-la-culture>
- (19) Paul Ricœur ; La mémoire, l'histoire, l'oubli, Seuil. Paris, 2000, p. IV. (久米博訳；記憶・歴史・忘却〈上〉、新曜社、2004年、10頁)
- (20) Emmanuel Macron ; La lumière blanche du passé: Lecture de “la Mémoire, l'histoire, l'oubli”, de Paul Ricœur, *in* Esprit No. 266/267 (8/9), Août-septembre 2000, Paris, pp.16-31. Emmanuel Macron ; Les labyrinthes du politique. Que peut-on attendre pour 2012 et après ? , *in* Esprit, mars-avril 2011, Paris, pp.106-115.
- (21) <https://www.monde-diplomatique.fr/2017/05/BENILDE/57494>
<https://www.mediapart.fr/journal/france/080916/medias-quand-macron-etait-l-agent-double-de-minc-dans-la-bataille-du-monde>
- (22) グザヴィエ・ニール (Xavier Niel) およびマシウ・ピガス (Matthieu Pigasse) の2名とベルジェの計3名がル・モンドの出資者となった。
http://abonnes.lemonde.fr/actualite-medias/article/2010/09/22/societe-des-redacteurs-du-monde_1414683_3236.html
- (23) マクロンは、この時、ギリシャのアテネを訪問中であったが、ベルジェについて『彼は芸術家、虐げられた人々、少数者の側にあった。ピエール・ベルジェにあって、パッサー、闘士が消えた：「世紀の記憶」』と綴り、次のメッセージをツイートしている。Emmanuel Macron / Il fut du côté des artistes, des opprimés, des minoritaires. En Pierre Bergé disparaît un passeur, un militant ; une mémoire du siècle./

19:39 - 8 sept. 2017

- (24) http://abonnes.lemonde.fr/politique/article/2017/11/06/l-executif-veut-maintenir-le-rythme-des-reformes_5210728_823448.html
- (25) http://abonnes.lemonde.fr/politique/article/2017/10/30/quand-melenchon-admet-qu-il-a-perdu-une-manche-face-a-macron_5207680_823448.html
- (26) <http://www.lefigaro.fr/vox/politique/2017/01/17/31001-20170117ARTFIG00138-emmanuel-macron-la-coqueluche-des-medias.php>
- (27) <https://www.monde-diplomatique.fr/2017/05/BENILDE/57494>
- (28) http://abonnes.lemonde.fr/a-la-une/article/2014/02/21/michele-marchand-la-mimi-des-paparazzi_4370951_3208.html
- (29) <https://tempsreel.nouvelobs.com/presidentielle-2017/20170324.OBS7068/mimi-l-etonnante-pretresse-des-paparazzis-qui-conseille-les-macron.html>
- (30) Anne Fulda ; *op.cit.*, p.177.
- (31) https://www.francetvinfo.fr/replay-magazine/france-2/des-paroles-et-des-actes/des-paroles-et-des-actes-du-jeudi-12-mars-2015_841451.html
- (32) <http://bfmbusiness.bfmtv.com/entreprise/pourquoi-facebook-inquiete-obama-1317924.html>
- (33) http://www.lemonde.fr/international/article/2017/07/07/trump-et-les-medias-une-guerre-tres-rentable_5157285_3210.html
- (34) <http://time.com/emmanuel-macron-president-france-interview/>
- (35) *ibid.* “I was very popular at the beginning of my mandate, because I didn’t do anything for the first week after my election,” he says. “If you act, and it is because of your actions that you lose popularity, fine.”
- (36) En revanche, si le pari du libre-échange et de la « flexisécurité » fonctionne, le Time promet un avenir radieux à la France, qui « pourrait devenir une puissance mondiale beaucoup plus importante qu’elle ne l’a été depuis des décennies ».
- <http://www.leparisien.fr/politique/macron-bientot-aux-commandes-de-l-europe-selon-time-s-il-s-impose-en-france-09-11-2017-7383768.php>
- (37) “Fully 59% of the French say that they back labour reform. More protests will follow. Harder battles, over pensions, taxation, public spending and education, lie ahead. Mr Macron needs to keep his nerve, but, astonishingly, he has already passed his first big test.” <https://www.economist.com/news/leaders/21729743-dynamic-emmanuel-macron-and-diminished-angela-merkel-point-new-order-europe>
- (38) “But were he on the site, he could scarcely have missed the outraged hashtags as demonstrators stormed the streets to protest his sweeping rewrite of French labor laws.”, *in* Time (*op. cit.*).
- (39) “What we have to do is to find the appropriate answer to decrease tension and protect people, people in the region — and I want to think of South Korean people, living in begin fighting (…). I want to think about all region and our Japanese friends”
- <http://cnnpressroom.blogs.cnn.com/2017/09/19/cnn-exclusive-french-president-emmanuel-macron-speaks-to-christiane-amanpour/>

- (40) https://www.washingtonpost.com/opinions/global-opinions/macron-is-on-a-mission-to-save-trump-from-himself/2017/09/20/86e9b258-9e52-11e7-8ea1-ed975285475e_story.html?utm_term=.419c7715e542
<http://time.com/4949877/donald-trump-emmanuel-macron-united-nations/>
- (41) <http://www.bvoltaire.fr/macron-a-lonu-presque-beau-villepin/>
- (42) <http://www.elysee.fr/declarations/article/discours-d-emmanuel-macron-a-la-communaute-francaise-en-grece/>
- (43) “A Athènes, Macron assure qu’il ne « cédera rien » sur les réformes
A quelques jours de la première manifestation contre la réforme du droit du travail, le président de la République a stigmatisé les « fainéants », les « cyniques » et les « extrêmes ».” http://www.lemonde.fr/politique/article/2017/09/08/a-athenes-macron-assure-qu-il-ne-cedera-rien-sur-les-reformes_5182994_823448.html
- (44) “arrêtons de parler de manière circulaire de la communication”
<https://www.ouest-france.fr/europe/france/emmanuel-macron-trouve-les-medias-francais-totalement-narcissiques-5257410>
- (45) “les médias français s’intéressent trop à la communication et pas assez au contenu”
<https://www.ouest-france.fr/europe/france/emmanuel-macron-trouve-les-medias-francais-totalement-narcissiques-5257410>
- (46) <https://www.ouest-france.fr/europe/france/emmanuel-macron-trouve-les-medias-francais-totalement-narcissiques-5257410>
- (47) Jean-Marie Charon ; La Presse d’information multisupports, Uppr Editions, 2016 http://www.lemonde.fr/idees/article/2017/08/03/la-creation-d-un-media-par-la-republique-en-marche-est-un-archaisme_5168056_3232.html
- (48) http://www.lemonde.fr/idees/article/2017/07/28/un-service-de-propagande-se-dit-toujours-etre-un-media-d-information_5166077_3232.html
- (49) Francis Balle ; Médias et société, 10e édition, Montchrestien, Paris, 872pp.
- (50) “Il n’a pas su imposer sa légitimité, en faisant comprendre à ses concitoyens à quel point son rôle était important, pour faire vivre le débat démocratique.”
http://www.lemonde.fr/idees/article/2017/07/28/un-service-de-propagande-se-dit-toujours-etre-un-media-d-information_5166077_3232.html
- (51) http://www.liberation.fr/planete/2017/12/03/a-paris-le-manifeste-anti-trump-de-barack-obama_1614107
<http://www.leparisien.fr/politique/qui-sont-les-napoleons-le-club-a-l-origine-de-la-venue-d-obama-a-paris-01-12-2017-7428192.php>